

「アライグマシンポジウム 2013」

アライグマの社会・繁殖・対策

資料集

プログラム

総合司会：竹下信雄氏（生物多様性 JAPAN）

13：00 開会の挨拶

13：05 講演 「Social Associations and Mating Behavior of the Raccoon」

アライグマの社会的関係と交尾行動

Stephanie Hauver 氏 Cornell University（米国コーネル大学）

逐語訳通訳 川道武男氏（関西野生生物研究所）

15：50 講演 「日本における外来アライグマの出産時期・産子数・妊娠率」

加藤卓也氏（日本獣医生命科学大学 獣医学部 野生動物学教室）

16：20 講演 「アライグマ対策効果の測定は可能か：京都府舞鶴市の事例」

川道美枝子氏（関西野生生物研究所 立命館大学客員研究員）

16：55 閉会の挨拶

資料集内容

シンポジウム開催にあたって

関西野生生物研究所

資料1 アライグマの社会的関係と交尾行動

Stephanie Hauver

資料2 アライグマの社会的関係と交尾行動

講演スライド日本語訳つき

資料3 日本における外来アライグマの出産時期・産子数・妊娠率

加藤卓也

資料4 アライグマ対策効果の測定は可能か：京都府舞鶴市の事例

川道美枝子

シンポジウム開催にあたって

川道美枝子 関西野生生物研究所

アライグマは主にペットとして輸入され家庭で飼育されていたが、その後逃亡や遺棄により、日本全国 47 都道府県で野生化している。アライグマの被害は深刻であり、被害の内容は多岐にわたり、農業、自然生態系、社寺を含む建造物への侵入と破壊、病気伝播のおそれなどがあげられる。

2004 年に成立した外来生物法（特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律）により、アライグマは特定外来生物に指定され、環境省はアライグマの根絶を目指している。しかしながら野外で繁殖し数を増加させているアライグマの根絶は難しいと考えられる。まず、アライグマの対策（主に捕獲による）を開始するために、侵入状況や生息域を知ることが必要である。これまで関西野生生物研究所では社寺に特異的につけられる爪痕や足跡の痕跡調査により、侵入の程度や侵入時期の推測が可能であることを見出し、一部の市町村との協力体制のもと、いち早い対策開始へと結びつけてきた。今回のシンポジウムでも、社寺調査とアライグマの対策が有効に機能してきたことを京都府舞鶴市の事例をあげて紹介する。

しかしながら、社寺や人家付近、耕作地での捕獲対策だけでは自然生態系の中で、日本に侵入してきたアライグマがどのような生息形態をもっているのかが全く不明である。アライグマの基本的生態を知ることが重要であることから、原産地アメリカでアライグマを調査し社会関係を明らかにしてきた S. Hauver 氏をお招きした。2012 年の連続シンポジウムでは同じくアメリカから D. Slate 氏をお招きして狂犬病対策の講演をしていただいた。Hauver 氏の研究も狂犬病対策の一環として行われたものである。アライグマ同志が 1 m 以内に接近した場合に接近した者同士を記録できる特殊な記録媒体をつけた首輪を装着させ、長期間にわたって、アライグマ同志の社会関係を明らかにしてきた。また、Hauver 氏は DNA 分析で親子関係を明らかにしたアライグマの繁殖生態の専門家でもある。

日本側からは加藤卓也氏に、日本における外来アライグマの出産時期・産子数・妊娠率について講演をいただく。どちらもアライグマに関する今後の対策に貴重な資料となることを期待する。

関西野生生物研究所は 2010 年からアライグマの様々な問題について海外、国内の事例等を紹介するシンポジウムを開催してきた。今回のシンポジウムを含めてこれらの活動が少しでもアライグマ対策に役立てば幸いである。

本シンポジウムを開催するにあたって、24 年度経団連自然保護基金の助成、平成 24 年度独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成いただいたことに感謝いたします。